

小勝禮子（以下 K） 生まれ育った環境から教えてください？

下向恵子（以下 S） 横浜で生まれ育ち、1978年、多摩美術大学1年まで実家にいました。父はサラリーマンで周りに芸術家がいるわけではなかったのですが、音楽や美術が好きな5歳上の姉がいて、影響を受けました。

K 美大に入ったのはなぜですか？油絵科を選んだ理由は？

S 高校の時、自分がずっと続けていかれる仕事は何か考えました。勉強ができる人は周りにたくさんいたので努力をする気にもなれず、絵を描いていく方が楽しそうだと思えました。油絵科を選んだのは特に深い理由があったわけではなく、高校の美術の先生が準備室で大きな絵を描いているのをよく見ていましたし、授業でも油絵を描いていました。他に何も知らなかったこともあり、自然と選んでいました。人と争うのは大の苦手で、案の定3年浪人しました。

K いつから画家として活動していこうと思いましたか？

S 高校の頃は先生をしながら絵を描いていこうとしか考えていなかったのですが、浪人を重ねて美術館や銀座、神田の画廊などの作品を見て廻り、作品を描くことに集中しているうちにやめられなくなりました(笑)。今でも忘れられないのは、神田の真木画廊でオーストラリアのステラークというアーティストが釣り針で天井から自分の肉体を吊るしたパフォーマンス。これには驚きました。こんな表現があるのかと。その頃は「もの派」の作品が多かったですね。

K 最初の個展はいつですか？

S 1980年、多摩美術大学の4年の時です。どういう経緯だったか忘れましたが銀座のGアートギャラリーという貸し画廊でした。当時、リ・ウーファン先生のゼミに参加しており、個展を見に来てくださったことをとても嬉しく覚えています。

K ご結婚はいつですか？絵を描き続けることを前提として結婚されたのですか？

S はい。大学3年の時に結婚しましたがそれで絵を描くことをやめるという考えは全くなかったです。

K 何回か引っ越しをされたそうですが、絵を描くスペースは確保できていましたか？

S はい、結婚してから7回引っ越しました。絵を描く場所は、学校、勤めていた会社の工場（夜仕事が終わってから）、タマビ卒業生の共同アトリエ(ジャンクハウス)、アパートを借りるなどそのとどきに確保しました。今は自宅とアトリエは一緒です。

K ご自分の転機になった出来事、個展、グループ展はありましたか？

S 1985年30歳でそれまで講師をしていた学校をやめて都立品川高等職業技術専門校（現都立城南職業能力開発センター）で1年間建築を勉強しました。そこでは今まで自分が教えていた高校新卒やOLだった人と同

ジクラスで一緒に学び、とても充実した楽しい時間でした。夫が独立して設計事務所を始めることになったので、いずれ一緒にやろうと思って二級建築士の資格も取りました。実はこの頃絵を描くことで生きていくことの大変さを感じ、すごく不安になっていました。

3年ほど建築の仕事をしていましたが、再び絵を描きたい気持ちがどんどん膨らんで来ました。

1988年に東京のO美術館でのグループ展「6人の平面+1」に参加しました。これが契機となり、再び絵を描き始めました。それまでパネルにアクリルを使って描いていましたが、その後和紙という素材に出会い、1989年には銀座コパヤシ画廊で個展「Happy Birthday to you」を開催。その頃は怖いもの知らずで、大きな画面に即興的に墨と顔彩を使って身体全体で描いていました。生まれ出て初めて全容が見えるような作品なので「Happy Birthday to you」と名付けました。この時はまだ裏彩色の技法は使っていません。

K 「Happy Birthday to you」に「Born in 年月日」がタイトルですね。すごくわかりやすいタイトルで整理する時にいいですね。日にちが描き上がった日なのですね。これは抽象なわけですが、何を表現しようと思ったのですか？和紙によって生まれる偶然の効果が面白いと思ったのですか？

S はい、それもあります。それと自分が発する「気」みたいなものが作品としてどう成り立つのかというところに興味がありました。

K すでにこの時、今の作風に通ずるところがありますね。ただ色彩はいろいろ使われているところは違いますが。それで、水彩ではなく顔彩を使ったのはなぜですか？

S 和紙に興味を持ってから、それに合う絵の具をいろいろ探して試す中で一番しっくり来ると感じました。水彩絵具は紙の上に乗せて美しい発色を得る絵の具だと感じるけれど、顔彩（主に水干絵の具）や墨は紙の中に入り込んで美しいと感じた。あと日本画の画材店に行くと油絵の具や水彩とは違った美しい色調の色がズラッと並んでいるわけです。これは使ってみたくて思いましたね。

K ただ日本画を学んだわけではないので膠を使った技法とはちがうわけですね。

S はい、ぜんぜん知らないなので、日本画を描いている友だちに聞いたり、本を読んだりしてやっています。失敗もずいぶんしています。

和紙を生のまま使っているので、ドロッピングした^{どうき}礬砂が茶色に変色してしまったりしました。膠の扱いは大

変むずかしい。失敗に失敗を重ねた今は、レジ^{どうき}ン礬砂と樹脂膠を使っています。それで気が楽になりました。

K 樹脂膠に変えたのはいつ頃ですか？

S 2005年くらいからです。

K これから時代を追って作品を見ていきたいと思います。1989年に続き、1990年のコバヤシ画廊での「Happy Birthday to you」参照①。

S それを 見て声をかけてくれたのが今は亡きギャラリー・キマイラのオーナー大岩紀子さんでした。1991年に初めて画廊での企画展「ENERGY 下向恵子」が開催されました。案内状は1990年の作品《Born in May 2,1990》参照②を使いました。案内状の作品も出品しました。そしてこの年父が亡くなったということがあり、墨と黄色の対比の強い大きな作品《ENERGY 1991 August》参照③(180×450cm)を描きました。ここから「ENERGY」シリーズの始まりです。



参照①1990《Happy Birthday to you》コバヤシ画廊

K （やはりお父さんが亡くなった）精神的動揺があったのですかね。何か卵がいっぱい投げ捨てられているような作品ですね。

S その後、色をたくさん使った《ENERGY》から国立の桜並木の脇に住み始めてから始まった墨と栗皮茶を使った花吹雪のような「ENERGY」シリーズへ変化して13年間（2003年まで）続きます。

毎春桜が満開になり、ある日大学通りを自転車で走っていたらすごい風で車道に花びらが渦巻いていた時があったのです。桜そのものというよりはエネルギーの凄さです。



参照②《Born in May 2,1990》

K 夜桜みたいですね。《ENERGY1994-1》参照④

1998年の東京国際フォーラム内のエキジビション・スペースも個展だったのですね。これも企画だったのですか？

S はい、ギャラリー・キマイラでの1997年の2回目の個展を見てくださった企画者の石山志保さんが誘ってくれました。ギャラリー・キマイラでは本当にいろいろな刺激を受けました。

K この辺から企画で呼んでももらえるようになったのですね。

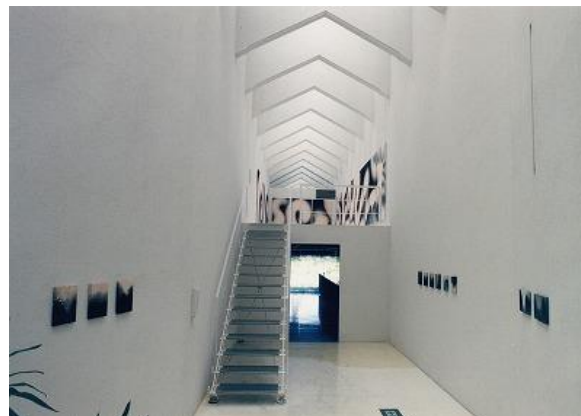


参照③1991'ENERGY'ギャラリー・キマイラ

S そうですね。それで今まで続けてこられたと思います。年に何度も個展をしていた時期もありましたが企画でやらせてもらえたからできたことです。

K やっぱりそこが大きいですね。(《ENERGY2002》参照⑤を指して) これはメタルアート・ミュージアム「光の谷」での作品ですね。

S はい、「ENERGY」シリーズの最終段階ですね。畳一畳分(180×90cm)のパネル 21 枚繋げた作品。この空間を見たとき、モネのオランジュリー美術館の睡蓮のようなイメージが浮かび、自分が描いた絵の中に入りたいと思いました。



参照⑤'ENERGY 2002'

K この作品は今もご自分でお持ちですね。

S はい、この作品で収納スペースはいっぱいです(笑)。

K 本当にすごいですよねー。エネルギーそのものって感じですね。

S 桜が変身して龍までってしまった感じです。

K 雲龍のような感じですね。この頃は下絵とか構想は考えていましたか？



参照⑤'ENERGY 2002'

S そうですね、縮尺 1/10 で構想を練りました。過去に 1 年間建築の勉強をしたことが、ここで空間意識として生きてきたと思います。(下絵を見ながら)

K なるほど、無駄なことはないのですね。

S アトリエは狭いので 3 枚のパネルを寝かして、2 枚描いては 1 枚足してずらしながら描いていきました。全容を見たのは会場に設置して初めてでした。

K これはさすがにサイト・スペシフィックといいますか、このミュージアムの空間に合わせて描いたのですね。真っ白な空間で、天井から自然光が入ってくる素晴らしい建築ですね。「ENERGY」シリーズの集大成的なものがこの発表だったのですね。

それで、次の「ATMOSPHERE」に移ったのはどういうきっかけだったのですか？

S 眼の前に森や川がある東京の西のはずれに引っ越したことです。環境が私に作品を描かせているようなところがあり、ここではもう「ENERGY」ではないなと感じましたね。色も自然に藍が中心になっていきました。

2004 年頃から大気や水の循環ということが近づいてきて、「ATMOSPHERE」、「CYCIE」、「SUIJIN」などが出てきました。

K この時は湿潤な空気、水、それを取り囲む山川などの自然環境をすごく感じます。
これは朱ですか？（《ATMOSPHERE.05-B1-9》）参照ここからは HP

S ほとんど藍と胡粉で描いていましたが、時々違う色も使いたくなって。これは「水銀朱」という色で毒性があるものです。「美しいものには毒がある」（笑）。ただ気持ちのいいとか美しいだけではなく、逆も作品の幅を広げるかなと思って。

K なるほど（笑）。それで 2008 年から「CYCIE」に移っていきます。

S 目の前の川の水が海まで流れ、水蒸気になって、雲になって、雨が降って、また川に戻ってという水の循環を日々の中で見ていて、水は無くなるのではなく、ぐるぐる廻っているのだと思いました。日の出町に来てからゴミの問題も見えてきて、隠されることはあっても廻っているだけだということと重なって、全てのものは無くなることはなく、ぐるぐる廻って戻ってくるのだと感じました。

K ああ輪廻みたいな。命が巡っていくような、なかなか気持ちがいい感じがしますね。
続いて 2008 年の「MIZUHANOME」というのは？

S 循環に気付いてから、人間の手を離れたところで自然を廻っているものがあって、なにか 大いなるもの がいるようなイメージ。水の神様のイメージはこのようなところから出てくるのかなと思い始めました。
そんなときに古事記の中に「弥都波能売（ミズハノメ）」という水の神様を見つけました。

K これからもう古事記なのですね。

S そうです。ミズハノメはイザナミのおしっこから生まれた神様です。

そして少しずつ古事記を読んでもみると、最初に出てくる神々は姿がない抽象的なエネルギー体としての存在だというのがわかって、「えっ？こんな考え方をしていたのか、面白いな」と思いました。

K 古事記にたどりついたのは、水の神様について考え、調べていったということからですか？

S そうです。水の神をどのように捉えた物語があるか調べて、いろいろ探していたときに。

K なるほどね。それで古事記のシリーズを「MYTHOS」としたわけですか？

S そうです。ギリシャ語の「神話」。ギリシャ語だと「エスキース」という意味も含まれているということを知り、英語の「MYTH」ではなく「MYTHOS」にしました。

K その後いろいろな神様が出てくるのですね。

それはその前にやっていた「ENERGY」にも通じると思うのですが、下向さんはどうも、かたちがないものに惹かれるのではないのでしょうか。「生命体」、「エネルギー体」と本人も書いていますけれども。

S そうですね、まさに。草木国土悉皆成仏という言葉がありますが、人間だけが特別ではなく、自然界の中の一部として存在する感覚。それぞれが色々なエネルギーを持っているという感覚です。

古事記では、人は「青人草」という草なので時々人にも見えるポチポチも登場しますけど。

K なるほど。つまりエネルギーを、自然界全てを含めて循環と捉えて描いてきたわけですが、思想的な支えとして古事記が必要になってきたのでしょうか？

S というか、イメージを広げていくなにかきっかけになるものが欲しかったので。たまたま今は古事記から引き出しているということです。

K 2008 年から古事記を始めていますが、その中で変化はありましたか？何しろ長いでですよね。

S 一点描いてはいろいろイメージが見えてきて、解決しないから続けています。

K この中での一番の変化は、2011 年の東日本大震災の年ですよね。

S この年の 7 月にギャラリーパリで個展を予定していて、「どうする???」という感じなのに（予定をキャンセルするのが嫌で）むりやり描いていた作品が結構あります。でも本当はあの時、「どうしたらいいの？描いている場合なの？」という気持ちでした。個展が終わってからはしばらく描けなくなりました。

2012 年 4 月ギャラリーみるめでの個展ですが、全て赤い作品を描くしかない、と思いました。

とにかく強い絵を描かなければと思いました。

K これは 2012 年の《MYTHOS 12-L-1 Izanami & Izanagi》p 12,13 ですね。これは闘争しているわけですか？

S いえ、これはそこまではまだ。最初の子作りに失敗して流された、ヒルコとアワシマが小さく中央奥の方にいます。

K どっちがイザナギですか？

S 右がイザナギ、左が女性のイザナミ。

K まるいところから子供が出てくる感じですかね。

S ハハハ、そうですね。

K 2014 年の《MYTHOS 14-Z-2 Ohokamuzumi》 p 22 はイザナギが投げつけて助かった桃ですね。

S この時はいっぱい桃ばかり描きました。桃色だけでなく藍の桃もあるんですよ。投げつけている感じで動きが出るようにあちこち向けて。

K オオカムズミ？

S はい。イザナギを助けたので神様に格上げされたのです。

K 《MYTHOS 14-S-5 Yomotsuhirasaka 1》 p21 は黄泉比良坂ですね。ただ闘争場面ですけど、闘争してないですよ。人間の激情をそのままには描かないのですね。

S そうですね。戦うのは苦手です。逃げるが勝ちみたいな方がいいですね（笑）。

K 《MYTHOS 15-L-1 Kami Laughing Heartily Together》 p 25 これは笑っているのでしたっけ。

S 2015 年の個展のタイトルが「神々共に咲ひき」です。アメノウズメがストリップのように踊り、神々が大笑いして振動を起こすのですが、その時に古事記に「神々共に咲ひき」という言葉が出て来るのですが、わらひきを花が「咲」の字を書いて「わらひき」と読ませている。ああこれは春のことなのだと思います、花が咲いているようなイメージを取り入れました。いつもと違う藍の色を使っています。いつもは本藍を使うのですが、この時は明るい美藍とか藍を使って春のイメージを出しました。

K 非常に明るくて華やかですよ。気持ちが前向きな明るい年だったのですかね。

S そうだったのかもしれないね。

K 2016 年《MYTHOS 16-HS-1》 p 26 このあたりから私は実際の作品を見せてもらっていますね。これも淡くてきれいな作品ですね。

S 軸装をしてみたくて描き始めた作品です。震災後にドイツ在住の作家、綿引展子さん企画の「TEGAMI 展」に参加したのですが、5 年後に「ドイツからもどってきた TEGAMI 5 年目展」を浜松の「鴨江アートセンター」で開催しました。収監所だったところをリノベーションしたスペースで、天井がとても高く素敵な建物でした。そこに合わせて制作しました。その後（244cm と長いので）なかなか展示できません（笑）。

それから、搬入搬出が非常に楽なこともあり 14 点ほど軸装しました。今はパネルに和紙ですが、軸装もできるような薄い楮紙を使ったりしています。

K 2017 年、かなりこの辺は今までの藍と朱というより、淡いきれいな緑を使って描いているように見えますが。なんというか非常に華やかで色っぽい感じの「DANCE」はアメノウズメの踊りですね？

S そうです。次の制作もアメノウズメを 100 態に近づけたいと思っています。和御魂（にぎみたま）、荒御魂（あらみたま）を対で描いていきます。コロナが収束するまで。

K そもそも下向さんはなぜ描くのですか？今まで描くことを続けてきた動機、モチベーションは何ですか？

S 描いていくことで一つずつ自分を解放していく感覚があります。結局、制作しているのは自分の意志でしかなく、描かなくても誰にも何も言われるわけでもなく、これで生活できているわけでもないのですが。描きたいという自分の意志だけです。しかしこれだけやめられないのはやはり表現したいものがあるのかなと思いますけど。

K 逆に今までたくさん作品を描いてきて、すごく満足したことはありますか？ああこれで描ききったと思ったことはありますか？

S 《ENERGY 2002》（メタルアート・ミュージアム「光の谷」での作品）は、これでこのシリーズは終わりと描きながらはつきりわかりましたね。でもそれは満足したというより、もう次にやりたいことが見つかったということだと思います。

K なるほどね。次々と区切りはつけつつ、次の目標が出てきているわけですかね。

美大時代から現在に至るまで 40 年以上描き続けて来られたのは、どういう理由があったと思いますか？

***74

S まず親がやりたいことに反対しなかったこと、音楽や美術の好きな姉がいたこと、学生結婚をしたこともあり夫が同士の関係だったこと、子供を作らなかったことが大きかったと思います。

私の場合は子供がいたら時間的にも経済的にも続けるのは無理だったと思います。

K そのへんは最初から自分の道を進もうと決めていらしたのですね。

収入を得る道としては非常勤で学校で教えてということですね。常勤だとえらい時間を取られてしまいますからね。

S そうですね。特に今はそうだと思います。この先のことは全然見えていないのでどうなることやら、ですが。

K 女性アーティストのウェブサイトを作っている関係で、女性のアーティストがどうやって自分のアーティストとしての人生を続けることができるのかということに興味があるのです。それで、女性だから不利だったと思ったことはなかったですか？

S そうですね。高校は元女子校で女子の人数が男子の倍。学業のトップも女子だったこともあり、不利だとは感じませんでしたね。

K 大学は共学なわけですが、下向さんの時代の男女数はどうでしたか？

S 女子は圧倒的に少なく、大学3、4年で私がいた立体や現代美術のクラスには、女子は私一人でした。他のクラスや学年はもう少しいましたが。

K 今は美大でも女性の方が圧倒的に多いみたいですがね。そういう女子が少数派だった時代には、先生たちはまともに指導しないという感じは全然なかったですか？

S そういうことは感じませんでしたが、本気でやるのかどうか、学校出たらやめてしまうのだろーと思われていたかもしれせんね（笑）。

K 逆に女性で得をしたと思ったことは今までありますか？

S 体力。体力は不利でもあり、搬入、搬出など助けてもらって得をしたということくらいです。まともに就職もしていないし、しっかり組織の中に入っていないので案外すり抜けてきたかもしれません。

K 確かに、今の非常勤の職場も女子校で、女の先生も多いわけですか？

S そうです。女性が頑張っている職場に入っていたからなのか、女性だから不利と感ずることは少なかったです。
ただ鈍くて気づかなかった面も多いにあると思いますけど。

K とにかく継続が力だと思いますので、今までやってこられたことはすごいことだと思います。

S 若いときからワッと自分を表現できるタイプの人間ではなかったもので、継続以外はないと思っていました。

K 特に 2002 年のあたりは力が結集されたような一つの集大成だったと思うのですが、あれが多くの人にみられていないのは残念だと思います。今後の進む方向はどのように考えていらっしゃいますか？

S この先は描ける限り、できるところまで制作を続けていきます。

K 画家には定年はないですからね。最後に若い画家を志していく人へのアドバイスをお願いします。

S これが、ひとりひとり違うので、自分で手さぐりで切り開くしか方法がなくて。参考になるようなことは意外とないのです。

K 下向さん自身があの人みたいになりたいとか、尊敬できる先輩の女性作家はいないのですか？

S うーん、あまり思いつきません。それぞれ違う道なので。同時代の友達はそれぞれ頑張っているので、自分なりにやっていけばいいなと思っています。

ですから若い人に対しても、続ける以外に方法はなく、やっていけばまたなにかが見えてきて、おもしろいこともやってくるので、やめないで続けることかな。ときどきは休んでも、とにかく続けることかな、私の経験ですけど。